

名大醫學部學友時報 2023 11

目次	
1. 教授就任	鳥田 緑(2)
2. 准教授就任	深田 優子(3)
3. 人事トピックス	菱田 朝陽(4)
	宮崎 景(5)
4. 医師倭人伝	石川 清猛(6)
5. 5th GAME-TEI 2023 Summer School 参加報告(7)
6. 鶴友対談～過去、現在、そして未来へ～(8)
7. 会員寄稿	櫻井 武(10)
8. 支部だより	東三河支部総会(12)
	名古屋支部総会
9. クラス会だより	中島 務(13)
	河村 守雄
	鷺見 学・安田あゆ子(14)
	蟹江重由子
10. 人生山あり谷あり	井口 昭久(15)
11. 名大ネットワークキャリアセミナーのお知らせ	
12. 令和4年度・令和5年度学友会年会費ご請求につきまして(16)
13. 住所変更・勤務先変更のご提出のお願い	
14. 編集後記	

教授就任



生物化学講座
分子生物学分野 教授

しまだ みどり
鳥田 緑

教授就任

生物化学講座 分子生物学分野 教授

しまだ みどり
島田 緑

〈経歴〉

- 1998年3月 大阪市立大学理学部生物学科卒業
2002年1月 英国サセックス大学 Genome Damage and Stability Centre Visiting student
2003年3月 大阪大学大学院理学研究科 生物科学専攻修了 博士(理学)取得
2003年4月 名古屋市立大学大学院医学研究科 基礎医学講座 細胞生化学 日本学術振興会特別研究員(PD)、特任助教、講師
2011年2月 内閣府 最先端・次世代研究開発支援プログラム 研究者兼任
2017年4月 山口大学共同獣医学部 生体機能学講座 獣医生化学 教授
2023年10月 名古屋大学大学院医学系研究科 生物化学講座 分子生物学 教授

〈業績〉

- Habara M, Sato Y, Goshima T, Sakurai M, Imai H, Shimizu H, Katayama Y, Hanaki S, Masaki T, Morimoto M, Nishikawa S, Toyama T, Shimada M. FKBP52 and FKBP51 Differentially Regulate the Stability of Estrogen Receptor in Breast Cancer. The Proceedings of the National Academy of Sciences 119 (15) : e2110256119. 2022
- Masaki T, Habara M, Sato Y, Goshima T, Maeda K, Hanaki S, Shimada M. Calcineurin regulates the stability and activity of estrogen receptor α . The Proceedings of the National Academy of Sciences 118 (44) : e2114258118. 2021
- Shimada M, Goshima T, Matsuo H, Johmura Y, Haruta M, Murata K, Tanaka H, Ikawa M, Nakanishi K, Nakanishi M. Essential role of auto-activation circuitry on Aurora B-mediated H2AX-pS121 in mitosis. Nature Communications 7 (1) :12059. 2016
- Shimada M, Yamada-Namikawa C, Murakami-Tonami Y, Yoshida T, Nakanishi M, Urano T, Murakami H. Cdc2p controls the forkhead transcription factor Fkh2p by phosphorylation during sexual differentiation in fission yeast. The EMBO Journal 27 (1) :132-142. 2008
- Shimada M, Niida H, Zineldeen DH, Tagami H, Tanaka M, Saito H, Nakanishi M. Chk1 is a histone H3 threonine 11 kinase that regulates DNA damage-induced transcriptional repression. Cell 132 (2) :221-232. 2008

このたび、2023年(令和5年)10月1日付けで、名古屋大学医学系研究科 生物化学講座 分子生物学(生化学第一)の教授を拝命いたしました。伝統ある名古屋大学の教員として迎えていただきましたことを心より光栄に思っております。ここに謹んでご挨拶申し上げます。

生化学という分野は、生命の根幹を理解し、医学の進歩や健康に貢献するための不可欠な学問であり、分子、細胞、生体系における複雑なプロセスを解明すると共に、疾患のメカニズムを理解することによって、新たな治療法や診断方法を開発するための基盤となります。私はこれまで大阪市立大学理学部、大阪大学理学研究科、英国サセックス大学 Genome Damage and Stability Center

において、ゲノム安定性を維持する機構の解明に取り組んできました。博士号を取得後は、名古屋市立大学医学研究科において遺伝情報の発現・継承の制御機構の解明に取り組みました。2017年からは山口大学共同獣医学部 獣医生化学において、がんの治療標的の同定と治療戦略開発に至るまで統合的な研究を行ってきました。その中で、研究拠点群形成プロジェクト「がん創薬」を立ち上げ、生化学的手法に加え、創薬化学、構造生物学、ゲノム生物学を専門とする研究者および臨床医の先生方とともに、がん創薬研究を牽引しようと努力してきました。特に乳がんの予後不良因子の同定と機能解析などを行い、プロリン異性化酵素が新たながん治療標的となりうる可能性を見出しました。プロリン異性化酵素はプロリンのシストランス変換を担う酵素で、複製、転写、翻訳、活性、局在、分解と言った様々な生理機能に関与している可能性が示されています。またその異常はがん、老化、炎症、不妊、神経変性疾患などの病態と関連していることが多数知られており、新たな研究が進みつつあります。リン酸化を中心としたタンパク質の化学修飾が今まで注目され研究されてきましたが、プロリンの異性化によるタンパク質の構造調節も重要な制御機構であると考えられます。現在、「ヒストンのプロリンの異性化による立体的調節」によって、より複雑な遺伝子発現調節を可能にしているのではないかとこの仮説を立て、この新しいコンセプトを実証し、遺伝子発現制御においてパラダイムシフトを起こすような研究に展開させることを大きな目標に掲げております。この制御の中心分子であるプロリン異性化酵素 FKBP52 はがんや神経変性疾患と深く関わっている様々なエビデンスがあり、また FKBP52 の阻害ががん治療に有効である結果が得られています。したがって本研究は新しい遺伝子発現制御機構の理解に貢献するだけでなく、ヒト医学に対する波及効果が期待できると信じております。オミクス解析など統合的な研究を行い、プロリン異性化酵素以外にもがんの治療標的を同定し機能解明をおこなっており、これからの研究の進展を楽しみにしております。

名古屋大学医学系研究科および学内の基礎・臨床講座との連携、国内外の研究者と共同研究を展開し、独創性の高い研究成果を発表していきたいと考えています。次世代を担う若手研究者の育成に貢献することも私の使命だと思っております。

今後とも皆様にはご指導、ご鞭撻賜りますようお願い申し上げます。

准教授就任

名古屋大学大学院医学系研究科 分子細胞薬理学 准教授

ふか た ゆう こ
深田 優子

〈経歴〉

- 1994年3月 神戸大学医学部医学科卒業
1994年6月 神戸大学医学部小児科学 研修医
2000年3月 奈良先端科学技術大学院大学バイオサイエンス研究科
博士後期課程修了
博士(バイオサイエンス)取得
2000年4月 日本学術振興会特別研究員(PD)(名古屋大学大学院
医学系研究科)
2003年4月 HFSP長期フェロー(米国カリフォルニア大学サンフ
ランシスコ校)
2005年4月 HFSP長期フェロー(国立長寿医療センター研究所)
2006年4月 国立長寿医療センター研究所 特任研究員
2007年6月 自然科学研究機構生理学研究所 専門研究職員
2007年10月 科学技術振興機構 さきがけ専任研究者(生理学研究所)
2007年12月 自然科学研究機構生理学研究所 生体膜研究部門 准教授
科学技術振興機構 さきがけ研究者(兼任)
2008年4月 総合研究大学院大学生命科学研究科 准教授(併任)
2023年8月 名古屋大学大学院医学系研究科 分子細胞薬理学 准教授
2023年8月 自然科学研究機構生理学研究所 生体膜研究部門 准教授(兼任)

〈業績〉

- van der Knoop MM[#], Maroofian R[#], Fukata Y[#], van Ierland Y, Karimiani EG et al. Biallelic ADAM22 pathogenic variants cause progressive encephalopathy and infantile-onset refractory epilepsy. Brain 2022; 145:2301-2312. [#], equally contributed.
- Fukata Y[#], Chen X[#], Chiken S, Hirano Y, Yamagata A et al. LGI1-ADAM22-MAGUK configures trans-synaptic nanoalignment for synaptic transmission and epilepsy prevention. Proc Natl Acad Sci USA 2021; 118:e2022580118. [#], equally contributed.
- Yokoi N, Fukata Y^{*}, Kase D, Miyazaki T, Jaegle M et al. Chemical corrector treatment ameliorates increased seizure susceptibility in a mouse model of familial epilepsy. Nat Med 2015; 21:19-26. ^{*}, co-corresponding author.
- Fukata Y, Fukata M. Protein palmitoylation in neuronal development and synaptic plasticity. Nat Rev Neurosci 2010; 11:161-175.
- Fukata Y, Adesnik H, Iwanaga T, Bredt DS, Nicoll RA et al. Epilepsy-related ligand/receptor complex LGI1 and ADAM22 regulate synaptic transmission. Science 2006; 313:1792-1795.

学友会の皆様におかれましては、益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。この度、2023年8月1日をもちまして名古屋大学大学院医学系研究科総合医学専攻細胞科学 分子細胞薬理学の准教授を拜命いたしました。ここに謹んでご挨拶申し上げます。

私は1994年に神戸大学医学部を卒業し、小児科研修(中村肇教授)を受けました。小児患者がもつ強い生命力に大いに感動する研修の日々でしたが、一方、1995年1月17日に起こってしまった阪神淡路大震災では、災害医療の現場で大変な無力感と喪失感を体験しました。そのような中、より深く生命のメカニズムを理解したいと思い、研修を1年間で終えて、大学院進学を決めました。当時は、恥ずかしいほど未熟で、具体的な研究分野も定まっていませんでしたが、神戸大学医学部の講義で当時最先端の分子生物学を教えて下さった貝淵弘三先生(現藤田医科大学センター長)の研究室に受け入れていただきました。貝淵先生は、新設の奈良先端科学技術大学院大学で研究室を立ち上げたばかりでしたが、当時1期生の天野睦紀先生(前 神経情報薬理学・准教授)らとともに、低分子量Gタンパク質RhoとRho-キナーゼによる平滑筋収縮機構の全容を明らかにされました。私も、「細胞骨格」研究を進めるなかで、少しですがこの一連の研究に関わり、多くのことを学んだ大学院生活でした。2000年に貝淵先生が名古屋大学大学院医学系研究科にご異動なさった際に、私も博士研究員として名古屋大学の研究・教育活動に微力ながら参加し、優秀な基礎医学セミナーの学生や大学院生らと一緒に研究に励みました。その後、アメリカUCSFへの留学を機に、研究対象を「細胞骨格」から「神経シナプス」に変えて以降、国立長寿医療センター研究所(長寿研)や生理学研究所(生理研)でも、一貫して「シナプス生物学」に関する研究を続けてきました。大学院、博士研究員の若い時に学んだ研究手法や考え方を基盤にして、幸いにも、主要な脳疾患のひとつであるてんかん病態の鍵となる「リガンド-受容体LGI1-ADAM22」を見出すことができました。この発見をてがかりに、シナプス伝達の制御機構、さらにはその破綻による脳病態の理解につながる知見を積み上げてきました。現在では、LGI1-ADAM22分子経路が、てんかんに留まらず、自己免疫性脳炎や神経発達障害など他の脳疾患にも関与することが明らかとなっています。

これまで奈良先端大、名古屋大学、UCSF、長寿研、生理研いずれの場所でも、多くの先生がたの教示や同僚らの助力に恵まれ、研究を進めることができました。また研究動向や研究手法などがめまぐるしく変化、発展するなか、国内外の研究者らとの議論や共同研究なしでは、成果を出すことはできませんでした。今後も、名古屋大学医学部の研究環境と研究室間交流を活かし、新たな研究手法や考え方を大いに取り入れて、研究を発展させたいと思っています。また、名古屋大学の医学部生や大学院生、若手スタッフらと共に成長を続け、真に社会に貢献する教育、研究環境を醸成するよう努力して参ります。大変未熟ではありますが、学友会の皆様には、なにとぞご指導、ご鞭撻を賜りたくお願い申し上げます。

人事トピックス

愛知医科大学医学部公衆衛生学講座 教授

ひしだ 朝陽
菱田

〈略歴〉

1998年3月 名古屋大学医学部医学科 卒業
1998年4月 名古屋第一赤十字病院 内科研修医
2005年3月 名古屋大学大学院医学系研究科・分子細胞内科学(血液内科) 博士課程修了
2006年4月 東京大学医科学研究所ヒトゲノム解析センターシーケンス解析分野リサーチフェロー
2012年5月 ノースカロライナ大学チャペルヒル校公衆衛生大学院 (MPH 取得)
2015年5月 名古屋大学大学院医学系研究科予防医学 講師
2020年1月 名古屋大学大学院医学系研究科予防医学 准教授
2023年10月 愛知医科大学医学部公衆衛生学講座 教授

〈業績〉

- Hishida A, Yamada H, Ando Y, Okugawa Y, Shiozawa M, Miyagi Y, et al. Investigation of miRNA expression profiles using cohort samples reveals potential early detectability of colorectal cancers by serum miR-26a-5p before clinical diagnosis. *Oncol Lett.* 23 (3) :87, 2022.
- Hishida A, Ugai T, Fujii R, Nakatochi M, Wu MC, Ito H, et al. GWAS analysis reveals a significant contribution of PSCA to the risk of *Helicobacter pylori*-induced gastric atrophy. *Carcinogenesis.* 40 (5) :661-668, 2019.
- Hishida A, Nakatochi M, Akiyama M, Kamatani Y, Nishiyama T, Ito H, et al. Genome-Wide Association Study of Renal Function Traits: Results from the Japan Multi-Institutional Collaborative Cohort Study. *Am J Nephrol.* 47 (5) :304-316, 2018.

名大友会の先生方に於かれましては益々ご活躍のこととお慶び申し上げます。この度お蔭様で、令和5年10月1日を以ちまして愛知医科大学公衆衛生学の教授に着任しましたのでこの場をお借りして御礼申し上げますと共にご報告申し上げます。

私は平成10(1998)年に名古屋大学医学部を卒業後、名古屋第一赤十字病院で循環器内科・血液内科を中心とした内科研修を行い、その後名大血液内科在籍時には、直江知樹前教授の御指導の下、化学療法と感染症対策を中心とした支持療法からなる血内臨床と、白血病の分子生物学について学びました。また入局時に医局長でいらっした谷本光音先生のご紹介で、同じく学友先輩の濱島信之先生が室長を務めておられた愛知県がんセンター研究所・疫学予防部に研修生としてお世話になり、分子疫学研究に勤めました。その後、名大予防医学の濱島信之前教授、若井建志教授の御指導の下、ゲノム情報に基づく疾患の個別化予防を目指したわが国初の大規模ゲノムコホート

研究である、J-MICC Study に約15年間携わり、慢性腎臓病やピロリ菌関連萎縮性胃炎のゲノムワイド関連研究 (GWAS) による遺伝要因解明など、多くの分子疫学領域での成果を報告させて頂きました。

一方で近年、慢性骨髄性白血病などの血液がん領域に代表される分子標的療法をはじめとする先進医療分野に注目が集まると同時に、急激に進む世界的にも稀に見る少子高齢化がわが国では進んでおり、超高齢社会時代が既に到来しております。アメリカでは10年以上前から、先進医療の偏重に伴うプライマリケアの危機が叫ばれておりましたが、正しく同様な危機的状況が現在のわが国でも多く訪れている様に日常臨床を含む実体験を通じて肌で感じております。また最近では疫学の分野において、レセプトデータやDPCデータを活用した大規模医療データであるリアルワールドデータ (RWD) 研究がわが国でも行われつつあり、疾患の治療や予防に関する実臨床へのインパクトのある報告が東大臨床疫学のグループを中心に次々となされ始めております。

私が着任しました愛知医科大学は昨年、昭和47(1972)年の建学から50周年を迎え、「具眼考究」の学是の下、個々の患者の正確な病態とともに様々な視点から包括的・全人的に患者を正しく把握し対処する方針の下、医学教育と研究・診療を活発に推進しています。また愛知医大公衆衛生学講座は、前任の菊地正悟名誉教授や林櫻松特任教授を中心に、胃がんや膵がん、胆道がんなどの分子疫学を含む疫学・予防医学の研究に精力的に取り組んで来られた歴史を持ち、豊富な検体とデータの蓄積があります。

これからは名大神経内科名誉教授でもあられます祖父江元愛知医大理事長をはじめとする学友諸先輩の暖かい御指導と愛知医大の大変恵まれた環境の下、今まで約20年にわたり取り組んでまいりました分子疫学研究成果の予防医療への還元を目指すと共に、近年さらに急速に進む超高齢社会におけるプライマリケア領域での大規模臨床データ解析と地域の高齢者福祉を中心とした公衆衛生分野の人材育成にも取り組み、高齢者のプライマリケア・疾患重症化予防に役立つ研究・教育活動を展開していきたいと考えております。

名大血液内科の清井仁教授、同予防医学の若井建志教授をはじめ学友の先生方にはこれからも臨床・研究・教育の多方面でお世話になるかと存じますが、引き続き変わらぬ御指導・ご鞭撻を賜ります様、何卒よろしくご報告申し上げます。

人事トピックス

名古屋市立大学 大学院医学研究科 総合診療医学・総合内科学 教授

みやざき けい
宮崎 景

〈経歴〉

1997年3月 名古屋大学医学部卒業
1997年5月 土岐市立総合病院 臨床研修医、内科、循環器内科
2002年8月 国家公務員共済組合連合会名城病院 循環器科
2003年4月 名古屋大学大学院医学系研究科健康社会医学専攻
(医学博士)
2006年4月 名古屋大学医学部総合診療科 嘱託研究員
2008年7月 University of Michigan Family Medicine
Residency Program, House Officer
2011年10月 みえ医療福祉生活協同組合高茶屋診療所
(三重家庭医療センター 高茶屋)
2020年4月 三重大学医学部名張地域医療学講座 講師
2022年4月 名古屋大学医学部研究科地域医療教育学講座
特任准教授
2023年8月 名古屋市立大学大学院医学研究科
総合診療医学・総合内科学 主任教授

〈業績文献〉

1. [Miyazaki K](#), Sato J, Mukohara K, Kitamura K, Saito S, Ban N.
Attitudes of Japanese Primary Care Physicians towards Publicly Endorsed Periodic Health Examinations: a Cross Sectional Survey. *Asian Pacific Journal of Cancer Prevention*. 2007; 8:258-262. PMID:17696742.
2. [Miyazaki K](#)
Overdiagnosis or not? 2017 ACC/AHA high blood pressure clinical practice guideline:
Consequences of intellectual conflict of interest. *J Gen Fam Med*. 2018; 19 (4) :123-126. PMID:29998041.
3. [Miyazaki K](#), Taguchi T, Takemura Y.
Effect of Daily Multidisciplinary Team Reflection in Ambulatory Care: A Qualitative Analysis. *J Multidiscip Healthc*. 2022 Feb 22 (15) :323-331. PMID: 35228803.

学友会のみなさまにおかれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。この度、2023年8月1日付で名古屋市立大学大学院医学研究科総合診療医学・総合内科学分野教授を拝命いたしました。ここに謹んでご挨拶申し上げます。

私は1997年に名古屋大学医学部を卒業し、内科、循環器内科で研鑽を積み、2003年より名古屋大学の総合診療部にて、伴信太郎教授のご指導のもと総合診療医としての研鑽および大学院生としてプライマリ・ケア研究を行いました。一般健診が寿命の延伸に寄与しないことは、当時から世界的にも自明な中、日本では広く行われていることに疑問を感じ、予防医療（健康

診断）のエビデンスに対する医師の認識調査を行いました。その後、現在まで20年近く各学会の学術大会、セミナー等でエビデンスに基づく予防医療の推進を目的に、ワークショップの開催、エビデンスレビューの活動を同僚とともに行っており（根拠に基づく予防医療推進サイト <https://www.evidencebased-prevmmed.jp/>）、現在では日本プライマリ・ケア連合学会の委員会活動として継続しています。

大学院修了後は、日本の総合診療が黎明期であったことと、自らは Clinician Educator としての将来を描いていたため、総合診療医としての研鑽、指導医としての研鑽、さらには総合診療研修の制度設計を学ぶために、2008年より米国ミシガン大学家庭医療科でレジデント及び指導医養成フェローとして研鑽を積みました。

帰国後は三重大学家庭医療学・地域医療学講座にお誘いいただき、津市内のクリニックを家庭医療センターとして発展させ、診療においては、外来、在宅診療を中心に、あかちゃんからお年寄りまで、またお産も含めた家庭医としての診療の実践、さらには専攻医プログラムの運営、研修医、医学生の教育に携わりました。EBM、臨床推論、医学教育、多職種連携をキーワードに細々とではありますが、臨床の疑問から発したプライマリ・ケア研究も継続しました。

2020年からは、三重大学に異動し、専攻医教育、学生教育へ活動の軸を移し、さらには2022年からは名古屋大学医学部で再び奉職する機会にも恵まれました。地域医療教育学講座にて地域枠医学生、卒業医師の指導、プライマリ・ケア研究及び大学附属病院における総合診療科での診療を行いました。

名古屋市立大学医学部は現在大きな変革の時期を迎えています。名古屋市との密接な連携のもと、この数年間で、市内の四病院を附属病院化し、名古屋市の医療を支える一大医療グループとしての体制を整えており、さらに2025年には救急災害医療センターを開棟することで、南海トラフ巨大地震や感染症（第二のコロナ）のアウトブレイクにも迅速に対応する体制を構築中です。総合診療医学・総合内科学教室も大きな期待を寄せられており、大学病院群における外来、病棟、救急で活躍する病院総合医/総合内科医、近隣クリニックで外来、在宅診療を展開する家庭医を養成し、大学内外、名古屋地域の皆さまの健康、幸せに貢献しながら、さらにはプライマリ・ケア研究の拠点づくりにも力を入れて参ります。名古屋大学、学友会の先生方とは、名古屋地区を支える仲間として、連携、交流を深めさせていただければ幸いです。益々のご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしく願い申し上げます。

特集

医師倭人伝

マウントサイナイ医科大学

いしかわ きよたけ
2002年卒 石川 清猛

研究留学で渡米してはや14年。変わったことと言えば、日本語が下手になった、髪が薄くなった、そして、腹回りが大きくなった。日本語でこのような文章を書くのも十数年ぶりだし、英語で仕事はストレス半端ないし、油こっぴりる巨大チーズピザも2枚はいけるようになった。どの変化もきつと長いアメリカ住まいの弊害だろう。

心は若いつもりでも、痛み始めた体でいつも働いている場所はニューヨーク、マンハッタンにあるマウントサイナイ医科大学だ。2009年に渡米してからずっと同じ場所で働いている。なんとセントラルパークの真横にある高層ビルの最上階(26階)にラボはある。さぞや壮観な眺めだろうと思われるかもしれないが、ラボに窓は一つもないので全くロケーションの恩恵はない。むしろエレベーターの動いてない日なんかは大惨事だ。ちなみに研究用動物たちの部屋には窓があり、うらやましい限りである。

私は岡崎市民病院で研修医、専攻医を計5年、名古屋第二赤十字病院で循環器医を2年勤めた後、医師8年目で、マウントサイナイに留学した。学生時代はテニス一筋だったので、基礎研究の知識は学生以下だった。基礎研究経験がなくても雇って貰えたのは、心臓遺伝子治療を臨床応用するための大型動物実験が担当だったから。遺伝子治療といっても当初の仕事は、豚に心カテをして、渡された液体(ウイルスベクター)を冠動脈に注入、その前後の心機能を心内圧やエコーで評価するといった内容だった。なんのことはない、人間で練習した手技を豚の治療に使う仕事である。アメリカ人の心カテができるドクターたちは人間相手に稼ぐので、動物なんて相手にしている暇はないとなり、私のような非アメリカ人の循環器医師にお鉢が回ってくるというわけだ。ただ、大型動物実験施設はアメリカでもそこまで多くはなく、心臓に特化しているところはより少ない。もともと留学しようと思ったのも人と違うことがしてみたいといった理由だったので、アメリカでもちょっと珍しい研究内容は自分に向いているかもしれない。面倒見がよく、色々サポートしてくれたボスのおかげと(せいぞろい?)、忍耐強くいつも合わせてくれる妻と子供たちのおかげで、日本に戻りたいとはあまり思うことなくあっという間に時が流れた。

それでもアメリカでずっとやっていくつもりはあまりなく、そのうち日本に帰ろうと思っていたので、PhDがあった方が戻りやすいかなと思い、ボスに頼んでマウントサイナイのPhDプログラムに無理やり入れてもらった。研究しながらの授業は少し大変だったけれども、なんとか卒業でき、2018年にかの有名なリンカーン

センターで卒業式をしたのはいい思い出だ。両親もわざわざ日本から来てくれ、アメリカ卒業式定番の四角い帽子とガウンを着て写真を撮った。

PhDはとったものの、たまたま獲れた大きなグラントのおかげで、ある程度自分の好きな研究ができるようになり、なかなか日本に戻る気にはならなかった。そんな時に突然ボスがマウントサイナイを辞めてしまい、完全一人立ちになってしまった。グラントは更新が間近だし、ラボメンバーの給料が全て自分にかかってきたりなど、かなり大変な時期もあったが、奇跡的にグラント更新に成功し今に至っている。基本的に自分やラボメンバーの給料、実験に必要なもの全てをグラントで賄う必要があるのですが、更新がせまるとプレッシャーが半端ないが、大型動物実験のユニークさや大変さを分かってくれて重宝してくれる人たちもいるので、楽しさややりがいはある。日本からも当ラボへ応募してきてくれる人が出てきて大変うれしい限りだが、まだ名大出身の方は誰も来てくれていない(応募者をお待ちしています)。

小さいころからあまのじゃくだとか、へ理屈ばかりだとか、よく言われた気がする。色々なことに対して素直に聞き入れず、いつも言い返す方法を考えていた。そんな性格が臨床よりも研究にあっていて、居心地がよかったためにアメリカ生活が長くなってしまったのかもしれない。反論ばかりなのはいいことばかりではないかもしれないけれど、客観的にものを見るのには役にたつ。

日本語は下手になったけど、英語はうまくなった。髪は薄くなったけど、人生は濃くなった。腹回りは大きくなったけど、人間も大きくなった。。と自信をもって反論できるような生活を送っていきたいと思う。



2018年 PHD 卒業式 リンカーンセンター前の広場で両親と子供たちと

参加報告

5th GAME-TEI 2023 Summer School 参加報告
Global Alliance of Medical Excellence - Transnational Educational Initiative

TEI (Transnational Educational Initiative) Summer Camp は、今回で5回目の開催となり、高麗大学で開催されました。今回の summer camp のテーマは簡潔には、医療がいかに Planetary Health に貢献できるか、ということです。Planetary Health とは公衆衛生、動物の衛生、社会の営みといった地球に生きる生物に関するもののみならず、地球にあるものすべての健康を考慮した概念となります。

この Summer Camp は、レクチャーやディスカッション、プレゼンを含んでいました。レクチャーの中で、多くの教授が特に Advocacy (提唱) について触れており、それに関してディスカッションを行う機会が多くありました。Planetary Health という概念の重要性を伝えるために、「いかなる根拠を持って伝えるか?」「誰に影響を与えるのか?」などという枠組みを意識して伝えることを多くの教授が強調され、つまりいかにして planetary health を達成するかを参加者が知るだけでは不十分であり、参加者がイニシアチブを持ってこの概念を達成するための解決策を考え、まだこの概念を知らない人間の意識や行動を変えるべきという教授たちからのメッセージを感じました。このような他者の行動変容を起こす Advocacy の予行練習として、先述の枠組みを具体的に考えるためのディスカッションと、それを外部に発信する力を養成するプレゼンがこのプログラムに組み込まれているのだと解釈しました。この Summer camp に参加した我々は、Planetary health の概念と、これをいかに発信するかという Advocacy のノウハウを持って帰ってきたと思います。

(4年 岩堀 直紀)

7月10日から14日までの5日間、5th GAME-TEI Summer School に参加しました。このサマースクールは、毎年夏に開催されるプログラムであり、今年は韓国の高麗大学で開催され、GAME (Global Alliance of Medical Excellence) 加盟国である7大学が参加しました。今回のテーマは、プラネタリーヘルスについてカバーしました。また、医学部だけでなく薬学部や看護学部の学生も参加したため、多職種連携についても学びました。

テーマについての講義やディスカッションを通して、プラネタリーヘルスに関する知識や価値観を学ぶとともに、このテーマを学ぶことの大切さに気付かされました。実際に気候変動が健康に与える悪影響について学び、人間の活動によって地球温暖化などの気候変動がどんどん進む今日、持続可能な医療を提供することは不可欠であることをより理解しました。それとともに、医療従事者や地域社会に対し、私たち全員がプラネタリーヘルスについて理解する必要があることを強く感じました。プラネタリーヘルスというテーマについての詳しい講義や教育を行う必要性を感じたとともに、プログラムに参加した学生の1人として、学んだことを他の学生たちに向けて教えるというような機会を設けることができるのであれば、ぜひみんなに伝えていきたいです。

また、世界各地の7大学の学生が参加していたため、大学による教育の違いや国それぞれの持続可能な医療に達するための解決策などについても学ぶことができました。講義中の意見交換時だけでなく、会食時やバスの移動時などにも他の学生たちと話す機会が多くあり、意見交換に加え文化的な交流もたくさんすることができ、非常に貴重で刺激的な経験となりました。

今回の海外での課外活動におきまして、貴重な機会をくださいました国際医学教育学の粕谷教授をはじめ、Itzel 先生、GAME 加盟大学の先生方、支援して下さった学生研究会の皆様にご心より感謝申し上げます。

(4年 水谷 友香)

鶴友対談 ～過去、現在、そして未来へ～

循環器内科 由良 義充 病院助教
消化器内科 廣瀬 崇 病院助教

産婦人科 村岡 彩子 助教
麻酔科 横山 達郎 特任助教

今回の『鶴友対談 ～過去、現在、そして未来へ～』では、軟式テニス部のOBである平成19年卒業の由良先生（循環器内科）、平成22年卒業の廣瀬先生（消化器内科）、村岡先生（産婦人科）、平成25年卒の横山先生（麻酔科）にインタビューをしてきました。部活動という縦の繋がりが現在どのように活かしているのか、詳しくお話をお聞きすることができました。

当時の部活を振り返って

- 廣瀬** 卒業してから10年以上経ちますが、今振り返って当時の部活動はどうでしたか？
- 横山** 人との繋がりの大切さを学びました。仲間と協力して挑戦する経験ができました。他に、信頼できる先輩や頼もしい後輩と知り合えたことも大きかったですね。
- 由良** 私にとって部活動は、簡単には言い表せないくらいに様々な要素が凝縮されていたように思います。私を含め大学に入学するまでは受験勉強に専念して、それ以外の経験がほとんどない学生が多いかと思うのですが、そんな世間知らずな若者がひとまず社会に出るために必要なことを順番に学んでいける経験の場になりました。ある意味コスバよく様々な経験ができました。
- 村岡** あのととき頑張って部活動に打ち込んだ経験値、体力は今も役に立っています。私は産婦人科なので夜遅くに呼ばれたりすることもあります。そのとき培った体力が活かしているように思います。
- 廣瀬** 現在、部活動への考え方や雰囲気が変わっていたりするかもしれないし、別に入らなくていいとは思いますが。ただ入っていた経験を踏まえて考えると、とりあえず入っておけば楽しいし、友達ができるし、後悔することはないと思います。大学生生活を思い返すとまず真っ先に部活のことが思い浮かびますね（笑）。
- 由良** 部活でなくとも真剣になにか一つのことを成し遂げる経験というのは、その後の人生を支える核になると思っています。私にとってはそれが部活でした。

キャリアについて

- 廣瀬** 僕は豊橋市民病院で研修をしました。消化器内科になりたいとある程度決めていたのでそのまま消化器内科になっています。実は初期研修の後にいろいろな病院に行くことも考えてはいましたが、現教授の川嶋先生に引き留めていただいて愛知県に残ることに決めました。現在は消化器内科で病院助教として働いています。
- 村岡** 私も廣瀬先生と同じ豊橋市民病院で研修をしたかっ

たのですが、妊娠、出産の関係で豊橋での研修を続けることができず、名大病院に戻していただきました。今でも当時の豊橋の同期には申し訳なかったと思っていますね。

後期研修まで名古屋大学でお世話になりましたが、大学以外でも臨床を学びたいと考え、豊田厚生病院で勉強させて頂いてから大学院に戻ってきました。同時に基礎研究もやってみたかったので6年間基礎研究に従事し、現在は産婦人科で助教を務めさせて頂いております。

- 廣瀬** 女性はキャリアの中で時期的にどうしても出産や育児と重なる部分があるので、それを考えながら仕事も頑張っていくことは本当に大変だと思います。別に申し訳ないだなんて思う必要はないですよ。
- 村岡** そういっていただけるとありがたいです。当時の豊橋のメンバーも本当に優しい人が多くて、今でも大学で会ったら挨拶をしてくれます。
- 由良** 大垣市民病院で研修をした後、循環器内科で勤務しました。臨床を続ける中で病気の仕組みについて様々な疑問を持つようになり、研究をするために大学院に入りました。大学院では薬理学教室で基礎研究を行い、その後アメリカで約5年間研究留学をして帰ってきました。現在は名古屋大学の循環器内科の病院助教で、臨床と研究の両方に携わっています。
- 横山** 大垣市民病院で研修をして、現在も大垣市民病院麻酔科に在籍しています。今年度から、非常勤医師となり、名古屋大学医学系研究科の特任助教というポストを頂きました。医師としてだけでなく、エンジニアとしても、貢献できるように活動しています。
- 廣瀬** 僕の場合臨床をやっていて基礎の道に行くという選択肢はあまりありませんでしたが、なぜ基礎研究の道に進まれたのですか？
- 村岡** 私も学生時代は研究のことはあまり考えていませんでした。しかし、大学院に戻ったタイミングで身近な先輩がバリバリ研究をしていて、すごかったいなと思ったことがきっかけで、自分もこの世界で勉強できたら面白そうだなと思いました。それに加



対談中の様子

え、比較的順序立てて考えていくことが好きなので、そういうことを実証できる場があるのだと知り、勉強してみたいと思いました。

廣瀬 僕は基礎をやっている先生にすごくリスペクトがあります。というのも、臨床では基本的に患者さんから直接感謝を受ける機会も多いですし、それが大きなエネルギーになります。けれど基礎研究というのは、目で見て分かる感謝を受ける機会がすごく少ない仕事だと思います。そういう意味で、信念を持って研究を続けられる人はすごいなと感じています。せっかくの機会ですが、時報部員のみなさんは何か聞きたいこととかありますか？

時報部員 由良先生にとって留学をするメリットは何ですか？

由良 私は米国留学でしたが、世界を見に行くと世界中から集まった自分と同じような熱意ある若者が切磋琢磨していて、様々な価値観に触れることができました。日本の研究レベルも高いのですが、やはり米国ではより幅広い分野で革新的な研究が行われているのを肌で感じることができました。そういった価値観に触れ、自分の人生の幅が広がるというメリットがあります。

ただ、それは海外留学に限った話ではなくて、例えば横山先生がデータサイエンスを学んでいるみたいに、自分の得意な分野から未知の世界へ飛び出して新しいことをしようとするのがすごく意味のあることだと思っています。

時報部員 横山先生はプログラミングなどたくさんの方に挑戦されていますが、それぞれやり遂げられているのはなぜですか？

横山 熱量だと思います。挑戦していますが、まだまだ未熟です。それらを仕事として、責任を持ってやり遂げることで、成長できるとしています。医師としても同様で、医師免許を取った時点でプロになるわけではなく、現場で揉まれていく中で成長していきます。

由良 少し話は変わりますが、キャリアの話になると村岡先生含め女性は、場合によっては出産や育児を経験しながら、バリバリ仕事をして多忙を極めるかと思えます。ですが、最近は男性も主体的に家事や育児を行うことが当たり前となりつつありますので、今後女医さんにとって働きやすくなっていくのかもしれないですね。

村岡 一定の時期に選択を迫られる場面も出てきますが、そのときに一生懸命考えて進んでいくしかないですね。どういう選択をしても結局何とかなるのかなとは思いますが(笑)。産婦人科では女性も多いこともあるかもしれませんが、男性医師も積極的に家事育児に関わっていらっしゃる先生が多く、素敵なことだな、と思います。



左から廣瀬先生、村岡先生、由良先生、横山先生

学生へひとこと

廣瀬 他の3人の先生にも言えることですが、自分の仕事を楽しいと思って続けています。そういう仕事、人生の方針のようなものを見つけれたらおもしろいですね。

横山 学生さんには興味を持ったことを頑張ってもらいたいです。興味あることに全力で取り組んでいれば、その先に何かがあると思います。能力が足りないと落ち込むことがあるかもしれないけれど、僕も何度も挫折と失敗を繰り返してここまでやれているので、完璧を求めすぎず進んでもらえたらと思います。

村岡 やりたいことが色々あって無理をしてしまう学生さんもいるかと思いますが、できない自分を少し認めてあげるといのも大切だと思います。もし悩んだり抱え込んだりすることがあったら部活の先輩であったり、私たちみたいなもっと上の先輩に相談してください。

由良 バイタリティが溢れている方は全部頑張れば良いと思います。ただ、そうでない方は無理して働き過ぎるのには注意が必要です。まずは自分の健康や家族の環境をしっかりと整えていくのが大切で、余裕ができてきたら少しずつ仕事の幅を広げていけば良いと思います。

廣瀬 研修医になると、自分がやりたいこととできなければいけないことに差ができてしまう時期が来ると思います。そういうときにネガティブになってしまうこともあります。同級生同士や上司、後輩たちと支え合いができると少し楽になりますね。また、仕事は人生の中の大きなウェイトを占めていると思いますが、自分の命、健康、家族みたいな本当に大切なものを優先してしっかり考えてみるというのは大切だと思います。

由良 若い方はそういうところで盲目的になってしまう部分があると思うので、もっと上の人たちが助言してあげられると楽になるのかもしれないですね。困ったときはいつでも頼ってください！